ときのす
時ノ寿の森通信

2013 秋号　NO.２９
2013.９.15 発行
NPO 法人 時ノ寿の森クラブ

http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori
Ｅ－mail：tokinosunomori@yahoo.co.jp
<連絡先>掛川市中宿１１３(TEL･FAX　0537-23-0412)　「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

＜もくじ＞

★ 秋号に寄せて　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

★ 活動報告　ｾﾌﾞﾝｲﾚﾌﾞﾝ記念財団助成「時ノ寿工房」の土壁完了　・・・・　３
森の夏祭り・コカリナ森のコンサートが最高でした　・・・・　４

★ 秋行事案内　日本財団助成による植樹祭　・・・・・・・・・・・・・・　別紙
9/30「大浜中学校・希望の森づくり」
10/19「千浜海岸防災林・希望の森づくり」
10/20「国安海岸防災林・希望の森づくり」
９～11 月活動予定　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　別紙

★ 時ノ寿ブログより
6 月 29 日「森で陶芸に親しむ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
7 月　9 日「木の文化・水の文化」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
7 月 15 日「森林所有者との信頼第一」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
7 月 23 日「大暑に思う」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
7 月 26 日「家づくりは伝統の素材で」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
８月　３日「猛暑の下で市民が協働」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
８月　５日「森林再生活動の基本は安全」・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
８月 15 日「平和といのちを考える」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
８月 24 日「生き方教えてくれたイチロー選手」・・・・・・・・・・・・・・　9
８月 31 日「森林所有者が源流域に集まる」・・・・・・・・・・・・・・・・　10
９月　４日「ＮＰＯの自立に向けて」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
９月　７日「世紀のプレゼンを見て」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
９月　８日「夢実現・2020 東京五輪」・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
９月　９日「７年後の姿を描こう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
９月 14 日「夏草や・・・」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

＜秋号に寄せて＞

７月はじめの梅雨明けと同時に、３５℃に達する猛暑となり、厳しく長い夏でした。会員の皆様お元気でお過ごしでしょうか。９月に入っても収まらない残暑ですが、来週あたりから秋の気配が深まってきそうな気象予報を聞き、ふとカレンダーに目をやると、もう来週は彼岸です。暑さ寒さも彼岸までと言った昔の人の自然を読む力の大きさに、感服してしまいます。

さて、2020 年オリンピック東京開催の歓喜に包まれる一方、東日本被災地は復興にはほど遠い状況の中で震災発生から２年半を迎え、福島原発事故の汚染水漏えい問題の深刻さは募るばかりです。また、オリンピック開催国選考で最後まで東京と競った親日国トルコでは、旅行中の日本人女子大学生二人が殺傷されるという衝撃的なニュースが飛び込んでくるなど、まさに悲喜こもごもの国内外の世相です。

社会経済状況を見ても、消費税引き上げ前の消費者心理を狙って、あらゆる業種において企業の力に物を言わせた消費者獲得競争が熾烈です。住宅建築をめぐる宣伝広告ラッシュも、ほんの一例でしかありません。一生に一度の庶民の夢である家づくりが、このような社会の動きに翻弄されてはいけないと思います。

時ノ寿の森クラブは、未来の子どもたちのために安心安全な都市づくりを目指した森づくりを進め、あわせて地域の大切な資源である森林と共生する文化を広める活動をしてきました。今日の社会の動きを見れば、ますますその使命は高まっていると感じます。そして、何よりもすべての子供たちが夢と希望に胸を膨らませ、社会の矛盾にへこたれることなく、元気いっぱいに何事にも挑戦してくれるような社会風土、社会基盤の構築が大切だと思います。

今秋、私たちは、３つの植樹祭を開催します。９月３０日は「掛川市立大浜中学校・希望の森づくり」、１０月１９日は「千浜海岸防災林・希望の森づくり」、１０月２０日は「国安海岸防災林・希望の森づくり」です。

会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

松 浦 成 夫

＜活動報告＞

セブン・イレブン記念財団助成「時ノ寿工房」
～伝統の素材による工法・土壁塗りが完了～

時ノ寿の森では、メンバーの「クラブハウス」、森林の恵みを社会の人々に広める「ビジターセンター」を目的とした（仮称）「時ノ寿工房」建築工事が進められています。会員自らが参加する「セルフ＆ビルド」方式です。それが可能な理由は、設計士をはじめ大工棟梁、左官職人、板金業、設備業、建具職人など家づくりに必要な専門家が、ＮＰＯ法人時ノ寿の森クラブには揃っているからです。現代は、施主でさえ建築工事現場に自由に立ち入ることのできない家づくりが大半ですが、時ノ寿の職人の皆さんは、その家を使用する人が参加する家づくりが大切だと思っています。

７月初旬から始まった土壁塗りでしたが、猛暑、雷雨、蚊の攻撃の中でずぶ濡れ、汗だく、泥まみれになり、がんばってくれました。そして、７月 28 日見事に荒塗りが完了しました。参加者１６名（うち子供２人）の顔には満足感があふれていました。家づくりこそ、人を一つにさせる素晴らしい「ものづくり」であると思いました。会員のみなさん、御苦労さまでした。

森の夏まつり　５０名が森の恵みを堪能しました

～森林コカリナコンサートが最高でした～

８月１８日、残暑厳しい日曜日でしたが、時ノ寿の森を吹く風には、秋の気配がたっぷりでした。大人３３名、子ども１２名、演奏者５名が、コンサート会場の「森の駅」で、コカリナから奏でられる音色に猛暑を忘れて、夢の世界に酔ってしまいました。そして、みんなで夏の思い出を語りながらのランチパーティーも、楽しかったですね。子どもたちが割ってくれたスカも最高でした。

＜時ノ寿ブログより＞

2013 年 6 月 29 日(土)
森で陶芸に親しむ

都市と山村が交流するツアーの第二弾「森で陶芸に親しむ」が、今日から「時ノ寿窯」で開催されています。

わがクラブには、陶芸家夫妻が時ノ寿の活動に共感して、時ノ寿の森近くに他県から移住して来てくれて、会の運営に大きな戦力になっています。以前より森林と陶芸は大変に相性がいいと思っていたので、夫妻の入会は当クラブにとっては、千載一遇の機会だと思っています。

時ノ寿の森林再生活動は、会員自らが森林と共生する生き方を楽しみながら、現代社会に森林と共生する文化を広めていくことを大事にしています。そういう意味において、森に陶芸窯があることは素晴らしいことだと思います。そんな時ノ寿窯ですので、森林との関係をより深くするため、窯の燃料の薪はスギ・ヒノキ間伐材です。一般的な陶芸家の薪窯の燃料は赤松材の薪のため、陶芸家たちは、赤松以外の薪で陶器は焼けないと思っているので、時ノ寿窯は大変興味深いと思います。

森の薪窯で、多くの人々が陶芸を体験してもらいたいと思います。今日も、市内のほか神奈川や岐阜からなど１０名程度の方々が体験しています。今ごろは、窯の温度が1000℃を超えているのでしょうか。真暗な森林での窯焚きに、初体験の人はきっと感動することでしょう。

2013 年 7 月 9 日(火)
木の文化・水の文化

先週、飛騨地方を旅してきました。妻と二人、雨の二日間、郡上八幡、下呂温泉、高山、ゆったりのんびり、木の文化の町、水の文化の町。一度訪ねてみたかった郡上八幡は、想っていた以上に木の文化と水の文化があふれた町でした。雨も上がり、しっとりした情緒は満点でした。綺麗な水が、町の隅々まで巡っている水路を満々と流れていて、感激しました。

翌日訪ねた高山の町は、２０年ぶりかもしれませんが、木の文化の絶品とも言える古い商家をゆったり、のんびり見たのは今回が初めてでした。木の家の素晴らしさに感動してしまいました。

飛騨の旅を通じて、先人たちが残してくれた日本固有の木の文化と水の文化の素晴ら

しさは、世界遺産にも匹敵するほどに文化の厚みを感じました。連日３５℃を超える猛暑の中で、私たちは「木」と「水」と共生する暮らし方を、真剣に考えるときではないでしょうか。

2013 年 7 月 15 日(月)
森林所有者との信頼第一

ＮＰＯの森林再生活動の第一歩は、森林所有者との信頼関係を結ぶことです。掛川市源流域の森林は小規模のため、間伐などの保全活動をする場合には、所有者探しから始まります。今年度も、静岡県森の力再生事業の採択を受け、源流域の荒廃した森林の間伐等、森林保全活動を実施したいと計画を進めています。今年度計画中の面積は約５０ｈａで、所有者は２０名以上も存在します。今日も一日中、これら所有者の方々を訪ね、事業の説明を行い、事業による森林保全活動への賛同を得てきました。

こうした活動を通じて痛感するのは、森林所有者の高齢化、住所地の広範囲化、また所有者の世代交代などです。そして、所有者の森林への関心は薄らいでいるということです。今後、森林所有者のこのような事情はますます拡大すると思われますが、ＮＰＯなどが社会的活動として森林保全を持続して行く場合、このような現象は大きな課題になることは必至です。

国土保全という側面から、国や行政が本腰を入れて国内の森林のあり方を考える時に来ていると思います。

2013 年 7 月 23 日(火)
大暑に思う

今日は、暦の上では二十四節季の大暑です。例年より 2 週間も早く梅雨が明け、同時に連日 35℃を超す猛暑が続いているためか、もう体は残暑のころの夏バテのような疲れが漂っていますが、ようやく夏休みが始まったところです。昨日は土用の丑の日とあって、庶民には高根の花となってしまった鰻ですが、猛暑の疲れを少しでも癒したいと、世間では鰻が食されたことでしょう。我が家では、一日遅れて今晩、夕食のだんらんに鰻が載りました。ＴＰＰ交渉が今日から始まりましたが、鰻に限らず日本固有の農林水産物については、海外への輸出が検討される以前に、国民の間でその安全や品質などの価値が認められるべきだと思います。間違っているでしょうか。

食糧のことで前述のような意見を言わせてもらいましたが、家づくりに使用される木

材についても同様のことが言えます。私たち日本人は、国内で生産される食糧や木材について、その価格や品質をセットで考えているだろうか、大変疑問です。日本の現代社会をみると、あまりにも大企業などによる情報発信によって、消費者である国民一人一人が翻弄されているように思えてなりません。

今、日本の食糧自給率は５０％を割り、木材自給率は３０％を割ってしまっています。このような状況は、海外へ輸出する以前の問題であると思います。ＴＰＰ交渉が本格化しますが、農業者の皆さんが大国からの大量生産による安い農産物輸入を危惧する一方で、私たち消費者もこの機会に、国内の農産物や木材について、その価格と品質、さらには気候風土における価値までを真剣に考えるべきです。

2013 年 7 月 26 日(金)
家づくりは伝統の素材

植物生態学で有名な横浜国大名誉教授の宮脇昭氏は「未来 9000 年まであらゆる生物のいのちを守ってくれるのは、本物の森しか他にありません。ですから永い時間を生きて来た土地本来の木を植えなければだめです。」と、私たちに教えてくれました。もちろん、ふるさとの森は本物の豊かな森にして行かなければいけません。しかし、知性を持つ人間たちこそ、もっと、身の回りの物事に目を凝らし、本物ではないものに置き換えられていることに気づいて貰いたいと思います。

その中で最もお願いしたいのは、365 日、就寝時間も含めれば 1 日のうちに最低 12 時間は生活を共にする「家」こそ、本物の素材で建てて欲しいということです。第一に、木材はその土地の風土に一番適した地元の木材を使用し、第二は温暖化による環境対策として、家には断熱効果の高い「土壁」を取り入れて下さい。さらに第三は、家づくりこそあらゆる視点から見て、「生涯コスト」を計算して下さい。愛する家族や子孫の「いのち」「ＤＮＡ」を守り、未来につなげるために・・・。

2013 年 8 月 3 日(土)
猛暑の下で市民が協働

わがＮＰＯ法人が行政と連携して昨年スタートさせた「希望の森づくりプロジェクト」のコンセプトは、市民と企業と行政が協働して森づくりを進めることにより安全安心な都市を造るということです。プロジェクトでは、昨年と今年の２ケ年で、市内７カ所に 62000 本の土地本来の郷土樹種の広葉樹を植えていますが、すでに昨年のうちに市内には５万本を超える希望の森が４箇所にできています。ただし、この５万本の苗木が豊かに育ち、市民の憩いの

場となる「希望の森」になるためには、４年くらいの間は、植えた苗木の周りに生い茂る草を取ってやることが大切です。

３日の土曜日、その草取りを行う「希望の森・育樹大作戦」が、中東遠総合医療センターの「希望の森」（苗木２３０００本）で行われました。掛川市・袋井市から総勢２００人が集まり、市民・企業・行政が協働により、苗木の周りに伸びた雑草を抜いて行きました。抜いた草は、土をふるい落とし、苗木の根元に置いてやります。こうすることにより、苗木の肥料と強い日差しから根を守ることが出来ます。７５００㎡の草取りも、２００人もの市民の皆様のご協力のお陰で、予定していた２時間の作業も正味１時間ほどで完了しました。多くの市民の皆様の森への気持ちは、きっと苗木にも伝わってくれるに違いありません。

この育樹大作戦は、来週も行われます。１０日土曜日は掛川市沖之須地内の海岸防災林植樹地（９０００本）で、１１日の日曜日は掛川市浜野地内の海岸防災林植樹地（１５０００本）で、朝８時開始で行います。多くの皆様のご参加をお願いします。

2013 年 8 月 5 日(月)

森林再生活動の基本は安全

都会を中心に、森林保全を社会全体で守っていくという機運が、若い世代や女性の人たちの間に広がっています。成熟社会に到達した我が国では、高い給料をもらえば満足したり、格調ある仕事に就いていれば自慢になるという時代ではなくなっているのです。社会的満足を得たいという志向が、森林に向いているということは、大いに結構です。しかし、林業とか森林保全活動は、肉体労働で危険を伴うことが多いため、最近森林ボランティアの間での事故が増えているそうです。

このような状況を踏まえて、先日、森づくり安全技術・技能全国協議会が公開シンポジウムを開催しました。そのタイトルは、「森の技術と安全～森林ボランティア新時代の安全を考える～」でした。わがＮＰＯ法人の場合も、ふるさとの森林を持続的に豊かな状態に守っていくための必須条件は、活動における「安全の担保」と「財政基盤の確立」です。何事も、慣れたころに事故が起きるものです。前身の任意団体から数えて満７年を迎え、常時活動に参加してくれるメンバーは、チェーンソーも草刈機も使用できるようになりました。しかし、それら森林作業機械の安全管理は、徹底できていなくて、日頃から反省をしていました。反省を踏まえて、公開シンポジウムに参加したのですが、この協議会が制度化した安全技術普及システムは、森林ボランティア活動には大変に素晴らしく、わがＮＰＯに直ぐにでも実用化したい制度だと思いました。しかし、その実用化には、全国協議会が認めた都道府県協議会が必要であるため、静岡県に協議会の設置をしてくれるようアクションを起こしたいと思います。

2013 年 8 月 15 日(木)
平和といのちを考える

68 回目の終戦の日、全国各地で戦没者追悼式が執り行われたことと思います。掛川市でも遺族の皆様をはじめ多くの来賓が参列して行われ、私も主催者掛川市の立場から参列しました。今年は、市内の遺族関係者の親族の中から２０人ほどの幼児から中学生が招かれて出席していました。年々遺族の皆様も高齢化が著しく、追悼式への参列者は減ってきているため、掛川市と遺族会の検討により、悲しい戦争体験を一人でも多くの若い世代に伝えて行くために、今年から子どもたちの参加を始めたのでした。大変良いことだと思います。

私も仕事上でここ数年戦没者追悼式に参列していますが、来賓の追悼の言葉やご遺族の言葉を聞いていますと、戦没者への追悼とともに、すべての掛川市民が等しく歴史を学び、平和主義を考える８月１５日にすべきであると思ってきました。

昨今、日本を取り巻くアジア情勢を鑑みると、日本の先の大戦への総括的な従来姿勢、また防衛力の弱体などを疑問視する議論が、声高になっています。その議論をどうこう言う前に、私たちはこの機会に、戦争の悲惨さや我が国のたどってきた歴史をしっかりと学ぶべきだと思います。そして、68 年間遵守されてきた平和主義の上に、日本に対する国際観が存在し、治安も秩序も守られている国家があるということを忘れてはならないと思います。

そのような重要な時期であるからこそ、８月１５日を全市民が「平和」と「いのち」の大切さを考える日にしたらいいと思います。そのようなことを思いながら、午後からは休暇をもらい、施設入所している母を連れて、南方で戦死した母の兄の墓参をしてきました。

2013 年 8 月 24 日(土)
生き方を教えてくれたイチロー選手

８月２３日の処暑、毎日新聞紙上のトップは「イチロー日米 4000 安打」と、その偉業を大きく称えていました。記事にあったイチロー選手の談話で一番感銘したのは、今年 10 月で 40 歳になるそうですが、そんな年齢の壁を前にしながらも、「あきらめられないんですよ。いろいろなことを。あきらめない自分がいることにあきらめている。野球に関しては妥協はない。」と、次への挑戦心をさりげなくにじませているところです。

すべての日本人が学ぶべき姿勢であると思いました。

奇しくも同じ紙面でそのほかに二つ、学ぶべきことが記された記事を読みました。一つは、コラム「余禄」に相田みつを美術館の夏休みの親子向け企画展「受身ー負ける練習」を訪ねての筆者の随想でした。相田さんは、作品「受身」の中で「受身とは投げ飛ばされる練習」「つまり、人の前で失敗をしたり、恥をさらす練習です」と、そして「長い人生には、カッコよく勝つことよりも、ぶざまに負けたり、だらしなく恥をさらすことのほうが、はるかに多いからです。」と、解説しているそうです。前途ある若者はもちろんですが、還暦を迎える私も、あらためて正しい「受身」を身に着けたいと思いました。

二つ目は、コラム「金言」の本当のリーダーシップです。筆者西川恵氏が、今評判の「採用基準」を読んでの感想でした。本の著者は、日本人に欠けているのは英語力でも、論理的思考でもなく、リーダーシップだと言っているそうです。そして、リーダーシップとは部下を率いる上司の力量といった狭い話ではなく、ポストや役職にかかわらず本来全員が発揮すべきもので、目先の問題解決に率先して当たる積極的な態度を言っているそうです。これも、年齢に関係なく生涯持ち続けたい姿勢であると思いました。

イチロー選手は、まさに正しい受身を、正しいリーダーシップを発揮されてきたからこそ、世界に誇る偉業を達成されたのだと確信しました。年齢に関係なく日本人に大切な姿勢だと思いますが、特に若者や子供たちには・・・。猛暑によって庶民は疲れ気味ですが、各界において判断力も気力も鈍っている日本社会に、素晴らしいカンフル剤を提供してくれたイチロー選手に感謝です。

2013 年 8 月 31 日(土)

森林所有者が源流域に集まる

静岡県は平成１８年度から「森づくり県民税」を導入し、県内の荒廃森林の間伐等を推進する森の力再生事業を実施しています。この事業の期間は１０年ということで、今年度は８年目になります。

時ノ寿の森クラブでは、平成２０年度からこの事業を導入して、時ノ寿の森をはじめ倉真川上流域一帯の荒廃森林の間伐を実施してきて、平成２４年度までに延べ約 161ｈａを終了しました。植林してから 30～40 年間も一度も間伐したことのない真っ暗な人工林は、見違えるように明るい森林に変わり、杉や檜の林の中には土地本来の広葉樹が自生し始めています。この調子で、杉や檜だけでない多様な樹種に森林が変わっていけば、急傾斜の森林でも保水力が高まり、大雨による災害防止効果も増すに違いありません。

この事業は、森林所有者の承諾が前提で、承諾の得られた森林について現地調査をして間伐等の事業計画を立て、静岡県に事業採択申請をし、認可が得られたのち事業を実施するというものです。私たちＮＰＯ法人は、林業の技術力を持っていないため、市内

の田旗造園建設株式会社と連携して、この事業を円滑に実施してきました。平成２５年度も、同様なスキームにより本事業の実施準備を進めてきましたが、先日、掛川市倉真地内４８ｈａの認可が得られました。

きょうは、事業実施にあたって、所有者に現地へ集まっていただき、事業現場説明会を実施しました。所有者の中には、８０歳代と思われる高齢の女性も参加してくれまして、林業が盛んな時代の森林の様子、今は大きな杉の木が立っている林も当時は茶畑だったという話など、懐かしい話を聞かせてもらえました。集まってくれた所有者の皆さんは、口々に森林の将来に不安を漏らしていました。しかし、このように事業が実施されることを、大変ありがたいことだと言ってくれました。そして、静岡県が始めたこの県民税の実施期間が、今年を含めてあと３年で終了することについては、税金の目的がまだ道半ばであるので、県民税徴収期間の延長により森林再生事業の一層の推進を望むという意見が、所有者全員から出されました。

私たちＮＰＯ法人としても、森の力再生事業の実績をもとに、さらなる推進の必要性を静岡県に伝えていきたいと思います。

2013 年 9 月 4 日(水)

ＮＰＯの自立に向けて

昨晩の理事会では、わがクラブの自立に向けた組織づくりについて議論をしました。ＮＰＯが自立するとは、どういうことなのかということを手始めに学びあったのですが、その中で私は、先日静岡県が開催した「新しい公共フォーラム」の際の講師の印象に残った言葉が思い出されたので、自らも振り返りながら他の５人の理事にも紹介してやりました。その講師が言われたことは、概略次のようなことでした。

「ＮＰＯとは、社会課題を担う団体のことで、自立しているＮＰＯとは、持続可能な社会解決能力を保有している団体のことをいいます。言いかえれば、ＮＰＯが自立するとは、本来の役割を果たすための人材や財源を自ら確保でき、その役割を担うために自ら企画していけるということです。従来のＮＰＯは、先に活動ありきでしたが、これからの時代は、それでは自立していくことはできません。役割を果たすためには、組織と人材、財政が確保されていなければダメです。３年先、５年先のありたい姿をイメージし、そこから逆算して今は何をやるべきかを考え、その課題解決策を計画的に実践していくリーダーシップが必要です。」

わがＮＰＯも、社会からの信頼を得つつあるので、いよいよ自立に向けてミッションを明確にし、それを果たしていくための組織と人材、財源を確保して行く大事な時期に入っています。明日は、平成 25 年度静岡県森林・林業技術研究発表会があり、そこで時ノ寿の森クラブの活動を発表してまいります。発表のテーマは「小規模森林で構成される源流域荒廃森林を持続的に保全するシステムへの挑戦」です。

2013 年 9 月 7 日(土)
世紀のプレゼンを見て

2020 年オリンピック開催地を決める最後のプレゼンテーションが、今晩ブエノスアイレスで行われています。先ほど、東京招致委員会の皆さんのプレゼンテーションが終わりました。その模様を見ていて、まさに世紀のプレゼンテーションだったと思いました。高円宮妃殿下をはじめ安倍総理大臣、猪瀬東京都知事など日本挙げてのメンバーということもありますが、それ以上に日本のイメージを多角的に高めることを可能にする、幅広いアイスリートたちから選ばれた最高のプレゼンターだったと思いました。そして、各位が述べられたメッセージでは、世界に誇る日本の心・文化・経済・治安が表現豊かに伝えられたと思いました。

特に、安倍総理をはじめ各位のメッセージの中で、随所に「オリンピック・ムーブメント」と言うことばが多用されていたことが、印象に残っています。かつて、50 年前に東京で開催されたときにはまだ小学生でしたが、オリンピックの五輪のマークの五つの意味を、先生が教えてくれたことを覚えています。日本国民全員が、東京でのオリンピックを自らのことと重ね合わせ、多様なことにチャレンジしたのではないでしょうか。あれから 50 年、日本はスポーツをはじめあらゆる面において、世界に肩を並べるまでに発展してきたと思います。しかし、どれほど発展しようとも、ニッポンが再びオリンピックを開催するということは、その目的が何であるかということが一番大切だと思います。

私は、福島原発事故の放射能汚染処理をはじめ、東日本被災地の復興の状況を案じながら、これまでオリンピック東京招致にはまったく興味を持ちませんでした。しかし、今晩の東京招致委員会のみなさんの熱く、日本を愛する心を聞きながら、本物のオリンピック・ムーブメントを東京で示すことこそが、今の日本にはとても必要なことではないかと思いました。

スポーツを通じて、友情、連帯、フェアプレーの精神を培い相互に理解し合うことにより 世界の人々が手をつなぎ、世界平和を目指す運動が「オリンピック・ムーブメント」です。明日朝、2020 年東京開催が決まりましたら、東京だけではなく、五輪開催を核にして国民全員が日本の未来を考えて意見を言い、国づくりに参加したいものです。

2013 年 9 月 8 日(日)
夢実現・2020 東京五輪

2020 年に再び東京でオリンピックが開催されることを、心から喜びたいと思います。そして、ＩＯＣの関係者をはじめ全世界の人々に対して、世界に誇れる物心両面の日本の本物を伝えてくれた招致委員会の皆さんに感謝をしたいと思います。

世紀の祭典と言われるオリンピックが、５６年の歳月を経て再び東京で開催されることを、スポーツはもちろんですが、あらゆる分野において未来に希望をつなげられる日本社会に、また国際社会になっていくための出発点になってほしいと思います。

前回昭和３９年の東京開催は、戦後日本の発展の出発点でした。しかし、その発展の一方で、どんな時代が来ても日本人として無くしてはいけない大切なものが消えようとしていることも数多くあることも事実だと思います。

今回は、これから誰も経験したことのない少子高齢社会が到来する出発点として、明日から２０２０年オリンピック開催を我がことのように国民皆で喜ぶとともに、これを契機にあらゆることについて未来のために考えていかなければいけないと思います。そして、なんといっても、すべての子供たちが夢と希望に胸を膨らませ、社会の矛盾にへこたれることなく、安心して元気いっぱいに何事にも挑戦していってくれるような社会風土、社会基盤を構築してほしいと願っています。

オリンピックは、東京で開催されようとも、日本の国土全体が、そしてそこに暮らす国民一人一人が、東京の人々と変わらぬ思いを持って暮らしているというのが、２０２０年、そしてそれ以降の日本社会のありたい姿だと、私は思っています。

2013 年 9 月 9 日(月)

7 年後の姿を描こう

2020 年はこれから７年後、一方 2006 年は今から７年前です。時ノ寿の森クラブにとって 2006 年９月は、未来の子供たちにふるさとの豊かな森を引き継ぐことを目指して森林再生活動をスタートした出発点です。そして、７年後の 2013 年９月８日、満７年となった時ノ寿ブログのアクセス数はちょうど１１万件に到達したその日、７年後に開催する 2020 年オリンピックの会場が東京に決まりました。

私にとっても、時ノ寿の森クラブにとっても、そのような７年という歳月の偶然を、大いにプラス思考で意識し、７年後の東京オリンピック開催に合わせて自分の人生も、時ノ寿の森クラブの経営も、７年後の姿を描き、その実現に向けてチャレンジして行こうと思います。

たかが７年、されど７年、変化の激しい時代の中で７年後をしっかりと見つめ、夢と希望を抱きながらそこに向かって行く生き方は、スポーツ選手に限らずすべての人に共通の大事なことではないでしょうか。

2013 年 9 月 14 日(土)
夏草や・・・

今秋の三連休の初日は、台風 18 号の影響もあってか、朝から 30℃を超す厳しい残暑でしたが、山の秋の装いは一歩ずつ進んでいました。夏草が伸びた「森の駅・時ノ寿」の周辺を歩いていると、松尾芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」ではありませんが、1 ヶ月前の楽しかった森の夏祭りの様子が、遠い昔の思い出のように浮かんできました。

時ノ寿の森の誇りは、まだここには日本の在来の多くの植物があることですが、伸びた夏草の中には、たくさんの外来種も勢力を広げていることに危機感を募らせました。目についたアメリカセンダングサを抜きましたが、これからの活動の中でも「帰化植物」を退治していくことが大切だと痛感しました。

先日、引退会見をされましたアニメ界巨匠の宮崎駿監督は、「トトロのような緑はもう描けません。あの作品を描いていたころは、まだ都市近郊に日本在来の植物がいっぱい生えていた。ところが今は帰化植物ばっかりになってしまった。」と嘆いていたそうです。

森の駅の傍らで、オトコエシ、ミズヒキなどが日本の秋を彩ってくれていて、心が和みました。ムラサキシキブの紫色の実は特別でした。